
東方独電波

D J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方独電波

【Nコード】

N6539V

【作者名】

DJ

【あらすじ】

雪代の東方の作品からキャラ引っ張ってきて、よそ様のオリキャラをゲストに、ラジオやろー、という趣旨の小説。
現状、隔月投稿となりそうです。

第一回放送（前書き）

注意書き：キャラ崩壊が激しいです。設定も曖昧で、ノリだけの適当さです。注意ください。

記念すべき第一回放送です。

ゲストは、東方九十九緑から、九十九片那さんです。

目録

└ 博麗神社出張分社┐

パーソナリティー

- ・ 水無月梗
- ・ 博麗霊

内容

- ・ 挨拶
- ・ 参拝者（ゲスト紹介）
- ・ 絵馬（お便りコーナー）
- ・ 天罰（作者からのお題にそって何かする）
- ・ 雑談（フリートーク）
- ・ 舞曲（曲放送）
- ・ 舞台裏（?????）

第一回放送

東方独電波 第一回放送 〔博麗神社出張分社〕

本日のパーソナリティ

梗↓水無月梗。または龍神白霊。

霊↓博麗霊。通称タマちゃん。

片↓九十九片那。参拝客（ゲスト）。

梗、霊「前置き……！」

梗「このラジオは博麗神社祭神の水無月梗と」

霊「博麗神社の巫女、博麗霊の二人でお届けしねーです」

梗「……しないの!？」

霊「冗談だってんですよ」

梗「なんだ、冗談か……」

霊「じゃあ、最初のこーん「ちょっと待った」……なんだってんですか？」

梗「まだ挨拶とかしてないよ」

霊「そう言えばそんなもありましたね。七面倒くせーですけど」

梗「まあまあ、そう言わない。じゃあ、まずは挨拶から」

霊「この番組は、ごらんのスポンサーの提供でお送りいたします」

↓株式会社博麗神社

梗「いつからボクの神社は株式会社になった!？」

霊「一株たったの1円だってんですよ。お買い得じゃねーですか」

梗「やつす!?!? どれだけ落ちぶれた会社!?! 不祥事起して大暴落でもしたの!?!」

霊「いや、冗談じゃねーですか。そんな本気にしねーでくださいよ」
梗「タマちゃん真顔で嘔吐くから本当かどうか分かりにくいんだよ」

霊「まあ、神社の利権が裏で多数の人間に売買されてるのは本当ですが」

梗「ウソ!?!」

霊「嘘だってんですよ」

梗「はあ、心臓に悪い冗談やめてくれないかな？」

霊「というか、さつきから脱線ばっかじゃねーですか。まったく、これだから白霊様は……」

梗「タマチャン……チヨットオハナシシヨウカ」

霊「い、いや、冗談じゃねーですか。いや、ちょ、ま……あ……」

ピチュン

梗「気を取り直して、挨拶しようか」

霊「がってんです」

梗「何その挨拶？」

霊「流行るかと思わねーでもねーです」

梗「ちよつと可愛いかも」

霊「か、かわ……」

梗「あ、また脱線してるね。じゃあ、挨拶挨拶」

霊「かか、かわい、可愛い……」

梗「タマちゃん、いい加減目を覚ましなよ」

霊「は！？」

梗「挨拶するよ？」

霊「え、あ、はい、了解だつてんです」

梗「東方独電波！！！！」

霊「博麗神社出張分社！！！！」

梗、霊「「始まり始まり……！！！！！！！！」」

梗「これだけ言うのに、どれだけ時間かかってるんだろうね、ボクたち」

霊「まったくだってんです」

梗「でもまあ、挨拶は終わったし、じゃあまず最初のコーナー行ってみようか」

霊「（栞……栞っと……）え〜っと、参拝者って書いてあるみてーですけど」

梗「（徹子の部屋みたい……）まあ。ようするにゲストだよねえ。というわけで、本日の参拝客、東方九十九録から来た刀の九十九神、九十九片那さんです」

片「初めまして、九十九片那と言います。このような事は初めてですので緊張しますがよろしくお願いします」

霊「よろしくってんです」

梗「よろしくね〜。ところで、ゲストがまさかの偽名なんだけど」

霊「名前忘れたからって、刀見て、片那って安直すぎやしねーですか？」

片「えう……す、すみません……自分の名前が思い出せなかったのだから、かく自分が自分だと確立できるように自分の腕を見て考えたんです……」

梗「分かりやすさは大事だよ、タマちゃん。そんなこと言ったら、タマちゃんなんて猫みたいだって言われるよ」

霊「誰が猫だってんですか……!」

梗「それは置いておいて。ところでボク思っただけど」

霊「嫌な予感しかしねーんですが、一応巫女として神の言葉をきこーじゃねーですか」

梗「小説内では、片那くんって小学四年生くらいの身長らしいんだよ」

片「はい、ルーミアよりほんの少し背が高くくらいですね」

霊「そんなの、ここにいるんだから見れば分かるじゃねーですか。後、メタは止めねーですか」

梗「いや、文字じゃ分からないよ。絵がないと」

霊「だからメタは（以下略）……それで、それがどうかしたってんですか？」

梗「ボクとタマちゃんと片那くん三人で、チビッコ同盟を組めるんじゃないかって」

片「…………それは楽しそうですね！」

霊「二人とも、とりあえず、死んでくれねーですか？」

梗「ひどー！？」

片「あう……！？」

霊「っていうか……誰がチビッコだってんですかー！」

梗、霊「閑話休題……」

梗「では、絵馬に行ってみようか」

霊「絵馬？博麗神社にそんなのねーじゃねーですか」

梗「ないね。まあ気にしない。ようはお便りコーナーのことだよ」

霊「それ言っちゃったら、わざわざ言い方を変えた意味がねーじゃねーですか……」

梗「はい、気にしない。ではまず最初のお便り行ってみよう。ちなみに今回リスナーからのお便りがあまりにも少なかったので、作者のリア友などにも送ってもらいました」

霊「見事な人望のなさだってんです。とりあえず、これを読んでいリスナーの皆さんは次からはお便りくだせーよ？」

梗「じゃあ、呼びかけもしたところで、最初のお便り行ってみよう、ラジオネーム『グランパ』さんからのお便りです。『東方って何？』

はい、これ焼却処分ね。論外論外」

霊「がつてんです（何かが燃える音）」

片「私も知らないんですが……」

梗「あゝいいのいいの、だってほら、ボくら主人公だし？」

霊「私はちげーますがね」

梗「じゃあ、気を取り直して次のお便り、ラジオネーム『うなじ大好き』さんから。『霊夢のうなじクンカクンカしたいです』。これも焼却処分ね。変態とセクハラのお便りは却下って言ったでしょ」

霊「あいあいさゝ（何かが燃える音）」

片「……………私の友人に手を出す、と言うのであれば……………斬り殺します」↑スペルカードを片手に目のハイライトが消失

梗「（意外と怖い子？）」

霊「（目が病んでねーですか？）」

梗「コホン、というかタマちゃん、新しい境地を開拓中？まあいいや、じゃあ次。ラジオネーム『咲夜LOVE』さん。『メイド長はPA』……………このネタはダメだよ。ボクが偉い人とかリスナーのみんなに怒られるんだから。ていうか、さつきからこんなのばっかじゃない？」

霊「えつと、はあ！？全部こんな感じじゃねーですかー！」

梗「あはは、作者……………どうなってるんだろぅねえ？」

霊「あ、次の分がきやがりました」

梗「えつと、こつちのお便りは……………ラジオネーム『腋巫女』さん……………ん？……………まあいいや。えつと内容は『適当に人気を博してリスナーから賽銭を搾り取ってきなさい』。って、これ霊夢？」

霊「じゃねーんですか？全く……………霊夢は」

片「霊夢さんらしいと言えづらいですね」

梗「ここにも霊夢の被害者が。霊夢らしい、そう思わされた時点でキミは被害者だよ」

霊「私も被害者ってことじゃねーですか、いえ、そんな気もしますが」

梗「ていうか、これお便りじゃなくて、ただの要求だよねえ。まあいいか、次行ってみよう、ラジオネーム『マスパ使い』、これってもしかして……………内容は『この間神社から借りた鏡割っちゃまった、わ

りい』だつて」

霊「魔理沙じゃねーですか!」

梗「あの娘、良く昔の鏡を持って行くよねえ」

霊「そんな笑いごとで済ますんじゃねーですよ!」

片「それよりも借りたものを壊しちゃダメですよ?」

梗「大丈夫、大丈夫、あれ全部、ボクが置いておいた偽物だから」

霊「まあそんなことじゃねーかとは思ってましたが……」

梗「はい、じゃあ次。ラジオネーム『瀟洒な従者』さんから。さつきからこれ……。いやまあいいか、えつと『私はとある館にて瀟洒なメイドをしている者です。ところで相談なのですが、最近、お嬢様と妹様が喧嘩して毎日のように館が半壊します、図書館の魔女からはうるさいと怒られ、主からは壊れた館を直しておけと言われ、門番は毎日寝てばかりで役に立ちません。私はこんな職場で働き続けても良いものなのでしょうか?』……重い!!こんなラジオでこんな内容出されても!」

霊「とりあえず別の職場を探すきゃねーのでは?」

片「……苦勞をしているんですね(涙)私で良ければお手伝いや愚痴を聞くくらいならしますよ」

梗「えつと……まあ、上司と良く話し合ってみたらどうだろう?労働条件も改善してもらえ……るのかな?」

霊「あの我俣吸血鬼が?」

梗「言っちゃダメだよ。誰のことか分かってても絶対に言っちゃダメだよ。ほら、タマちゃんもお便り読んでみて」

霊「仕方ねーですね。じゃあ、ラジオネーム『うー』さんから。

またですか……あそこの住人ただけ暇ですか……」

梗「そんな冷めた視線で見ないで、ほら内容読んで」

霊「はあ……。えつと『フ란のばーか。私のケーキ返せ』……」

…(怒)」

片「こ、子供ですか? (呆れ)」

梗「た、タマちゃん、落ち着いて……。ほ、ほら。えつと、一旦休憩

入ります」

（・・ω・） 御茶でもいかがですか？

（つ旦〇

と―）―）

片「誰ですかコレ→!？」

梗「気にしない気にしない」

霊「一休み、一休み」

梗「はい、何か合間に変なの入った気がするけど、再開。というわけで次、えっとラジオネーム『495歳の妹』さんから、もう嫌な予感しかないけど……えっと、内容は『お姉様のばーか。私のミートボール返せ』」

片「もしかしてこちらの方もですか？」

梗「アハハハ……ハハ……」

霊「もうあれです、ちよつと行ってキュツとして来ねーと」

梗「まままま、待った。ちよつと待った!! えっと、次、次こそは普通の……これだ!! ラジオネーム『みよんなやつ』さんからのお便りです。頼むよ、頼むから普通のものであつてよ……『えっと、私はとあるお屋敷で庭師などをさせてもらっている者です。ところで相談なのですが、最近私の主とそのご友人が喧嘩をされていて、お屋敷が倒壊したり、庭が蒸発したり、閻魔様に説教されたりします。』

……え、キミも……? いや、まだ続きが、きつと……『ですが、すでに仲直りし、事なきを得たのですが、倒壊した屋敷を見たお二人は、私に一言、頼んだ、とだけ言ってどこかに行ってしまうました。

どうにも途方に暮れており、ご相談にのって頂こうとこうして筆を取った次第であります』……えっと、その……」

片「……………こちらの方も大変ですね…（涙）もう、あれですね。」

私が行ってお手伝いや愚痴を聞いたりして楽をさせてあげたいです」

霊「あのスキマ妖怪に直さなければいいじゃねーですか」

梗「だからタマちゃん、誰のことか分かってても……もういいか、面倒だし。っていうか、あの二人も何してんの？とりあえず『みんなやつ』さん。紫には後で言うておくから、もうちょっと我慢しててね」

片「紫さん…友人として少し悲しいですよ（泣）」

霊「一応聞きますが、まだ幻想郷住人の阿呆な便り読む気じゃねーでしょうね」

梗「うゝっ、でもほら……折角送ってくれたわけだし、ってことで次。ラジオネーム『うー』さん、ってあれ？これさっきもあつたよね、あ、でも内容が違う『フランが、私が隠しておいた秘蔵の酒飲んだからでしょ！』ってこれさっきの続き？え、あ、ラジオネーム『495歳の妹』さんのもある、えっと『お姉様が私が楽しみにしてたお菓子食べたからだよ！』なんでこのラジオで会話してるの？っていうか、これ投書だよ？なんで会話成立してるんだろ？ねえ。キミたち本当に喧嘩中？自宅で同じ部屋でこれ書いてたりしないよね？」

片「……………もしかして実は仲が良いのでは？」

霊「ふ、ふふ、ふふふ……あの連中は本当に仕方ねーですねえ。これはオシオキにいかねーと」

梗「た、タマちゃん！？ちょ、どこに！？もうこのコーナー終了！タマちゃん、ちょっとどこに行くの！！タマちゃん！！！」

片「へ？ま、待つてくださーい！？」

パーソナリティーの突然の退場により、しばらく休憩が入ります。

「……」
「……」
「……」
「……」

「ただいま休憩中」

梗「というわけで次のコーナー行ってみようか。さっきの流れ？ 気にしない。ていうか、そんなものは存在しないから。というわけで天罰のコーナー。って、天罰？」

霊「えー、作者からのお題にそって何かする、という雑なコーナーみてーですね。基本的に罰ゲームみたいな内容なんで天罰、というみてーです」

片「罰ゲームですか…痛いのは嫌です……」

梗「なにそれ？」

霊「さあ？ あ、何か来たみてーです。えっと『お題に沿った会話を。ただし、一人一つずつクジを引き、それに書かれた条件で会話をすること。一番ダメだった人には、罰ゲーム』ということみて

「です」

梗「じゃあ、罰ゲームはなしの方向で。書き手が二人もいるのに、そんなのあったらややこしいよ」

霊「だからメタなのは止めねーですか……まあ、ちょっと作者と直談判してきますんで」

梗「いつてらっしやゝい」

しばらくお待ちください。

霊「作者を《自主規制》して《自主規制》で《自主規制》なことがあつて、無しになりました」

片「血いいいい！？！？」

梗「……生きてるの？作者？何か血溜りが見えるんだけど……グロはR18に引つかかるからダメだよ？」

霊「見えなければセーフじゃねーですか」

梗「堂々とその台詞が言えるタマちゃんが格好いいよ」

霊「何をわけの分かんねーこと言ってるんですか。そんなことより、クジを引かねーと」

梗「了解、じゃあえつと、あ、箱が来た。じゃあ、ボク最初に引くよ？えーつと、これだ。内容は『《みよん》を口癖にして会話する』

……は？」

片「あれ？先程の葉書のペンネームにあつたような気が……」

霊「……引きたくねーです」

梗「ダメだよ。やらないとコーナーにならないでしょ？」

霊「仕方ねーです……それじゃあこれで、えつと？『猫っばい口調で会話する』マジですか……？」

梗「タマちゃんいいなあ、いつもの口調をするだけでしょ？」

霊「私は、日常的にそんな言葉遣いじゃねーですよ……！」

片「可愛らしくて良いんじゃないでしょうか？次は私ですね？えつと……？『そーなのかー』……どうやら間違いみたいですな。」

もう一度引きます。つと…『語尾に《(なの)及び(の)》を付けて会話をする』へ…?」

梗「全員会話条件を引いたみよん?じゃあ、お題を引くみよん。お題は『最近疑問に思ったこと』…何みよん、このお昼のバラエティ番組に振られそうな話題」

霊「(もう始まってんじゃねーですか…)気にしたら負けってやつにゃんじゃねーですにゃん…:/」

片「なんだか?悪魔?って呼ばれそうな気がするの:/」

梗「タマちゃんたち顔真つ赤だみよん」

霊「う、うるせーにや!」

梗「ていうわけで、最近疑問に思ったことみよん。ボクは…『冷麦に入っている色違いの麺が何故入っているのか?』にするみよん」

霊「微妙なチョイスだにや」

片「でも確かに不思議です…なの。(うつうつ…言い慣れていないから忘れちゃいそうです)」

梗「だよね、だって不思議だみよん。味付けが違うわけでもないのに、何で入ってるんだみよん?」

片「彩りを豊かにするためじゃないでしょうか?なの!」

霊「子供に人気が出るからじゃにゃいか?」

梗「なるほどみよん…二人とも、一理あるかもみよん」

補足説明：冷麦に色違いの麺が入っているのは、素麺と区別を付けるためだそうです。 by wiki

霊「みよんみよんうぜーにゃん」

梗「みよんっ!」

片「その言い方は少しひどい気がします。なの」

霊「あ、ちよつとあの庭師っぽかったにゃ」

梗「妖夢も一回ふざけて『みよんなこと』とか言っただけなのに、よく弄られてるみよん」

霊「だにゃ」

片「一言言うだけでそんなことが起こるなんてとても恐ろしいの…

(汗)」

梗「それが東方クオリティだみよん」

霊「ただの揚げ足取りだにゃ」

梗「そう言わないみよん。じゃあ、ちよつとほのぼのした雰囲気を変えて、次、タマちゃん言ってみるみよん」

霊「最近疑問に思ったこと……『ずんだ豆ってなに?』」

梗「東北のほうで作られる、枝豆を加工した食品じゃなかったみよん?」

霊「そう、あれは作者が高校生の時」

梗「なんかたるい話が始まりそう……だみよん、危ない危ない、忘れてた……みよん」

片「言い慣れていないので忘れてしまいそうですよ……なの!また、忘れそうだったの……」

霊「休憩時間、自販機へジュースを買いに行ったところ、ふいに見つけた新商品『ずんだ豆ジュース』。好奇心マックスで思わず伸びた手、そして一口飲んだ、吐き出しそうになった豆臭さ、どれもこれも忘れられない思い出……だにゃん」

片「それは……災難だったんですね、なの」

梗「……忘れてたみよん、タマちゃん。じゃあ次は片那くんの番だみよん」

片「わ、私の番…なの!えつと…最近疑問に思ったこと『女の人数が増えるとなんで羞恥心が薄れていくの?』なの!これは…こちらの作者の話なの。夏だからかもしれないけど非常に薄い服を着ているクラスメイト、ふと気がつけばクラスメイトの服が透けて下着の色が!……作者は恥ずかしくなっすぐに誰もいない方向を向いて事なきを得たそうなの」

梗「うーん、みんなで渡れば怖くないってやつじゃないだろうか…
…みよん」

霊「今忘れてたにゃん？」

梗「気のせいだみよん。それよりタマちゃんも意見を言ってみよん」

霊「本人に聞けにゃー!!」

梗「うわゝ、ないわゝ。ぶった切ったみよん……」

霊「うるせーにゃ」

梗「……ていうか、なんか切なくなってきたので、このコーナーこれで終了で」

片「あ、しゃべり方を戻して良いんですね？」

梗「おっけゝ。いいよ。いやー、嫌なコーナーだったねえ」

霊「全くです。なんでこんなコーナーありやがりますか？」

梗「さあ？作者に聞いてよ、まったく。他のパーソナリティーたちはどうするんだろっねえ」

霊「はい、じゃあ次のコーナー行ってくてんです」

梗「じゃあ次のコーナー、雑談（舞台裏話も可）のコーナー。特にお題はしてせず、とにかく好きに話してください、だって」

霊「名前変えただけのフリートークじゃねーですか。しかも舞台裏の話もしてーんですか」

梗「言わなくていいよ。そういうこと。じゃあ、何か話すことある？」

霊「あるわけねーでしょ」

梗「そんな冷めた目で言われてもねえ……じゃあ、ここはゲストの片那くん、よろしく」

片「話すことですか？そうですね…そう言えば私、記憶が抜けているところがあるんですよ。あ、名前のことではないですよ？ルーミアを襲う変態までは覚えているんですがその後の記憶が抜けているの間に博麗神社に帰ってきていたんですよ（番外編のことです）霊夢さん達に尋ねても誰も教えてくれなくて…何があったんでしょうか？」

梗「いい、片那くん。世のなかにはね、知らないほうがいいことも

あるんだよ」

霊「というわけで、次の話題」

梗「ボク？そうだねえ、じゃあ、気に入らないクラスのあいつの消し方とか」

霊「却下に決まってるでしょーが！！」

梗「物理的なのと、精神的なやり方の二つでお得だよ？」

霊「何がですかー！？」

梗「え、聞きたい？じゃあ最初はね」

霊「いいです、けっこうです。止めやがれてんですー！」

梗「仕方ないなあ、じゃあ代々薄い博麗神社の巫女の胸の話題とk「死にますか……？」……ごめんなさい、謝るので封魔針は勘弁してください」

霊「……………」

梗「ごめん、ボクが悪かったから、そんなどぎつい目で睨まないで。うーん、じゃあ話を変えて、最近面白かった作品とか？」

霊「ここで言うことでもねーですよ」

梗「うーん、そうなると正直もう話すことも無いよね」

霊「ただ話題少ねーんですか……」

片「そうですね」

霊「じゃあ、ギリギリな裏話でもしますか？」

梗「例えば？」

霊「実は私、その場のノリだけで書いたワンポイントキャラだったとか」

梗「そうなの？けっこう今レギュラーっぽい気もするけど、ほら今だって元パーソナリティーの縁押しにかけて、ここに座ってるし」

霊「まあ、雪代縁も元々は設定も無かった存在ですし」

梗「うーん、メタだなあ」

霊「このラジオではメタいのも全然オツケーみてーですし」

梗「でもこの先のネタバレまでされると困るよ？」

霊「私死にます」

梗「嘘!？」

霊「嘘です」

梗「……………」

霊「……………」

梗「ラジオで沈黙はダメだね。放送事故になるし」

霊「もう何かだるくなってきたし、終りでいいんじゃないですか？」

梗「ぐだぐだだなあ」

霊「この先もずっとこんな風ですよ？」

梗「え、本当に？」

霊「この作者に何を期待してるんですか……」

梗「ボクが悪かったよ」

霊「はい、じゃあそろそろ次、舞曲、最後の曲放送行ってくてんです」

梗「だからそういうことは……まあいいか」

霊「何で舞曲？」

梗「良い名前が思いつかなかったから、紅魔館組みも含めて、適当な名前になってるんだよ」

霊「まさにグダグダじゃねーですか」

梗「気にしない、気にしない。じゃあ今日最後のコーナー、まずは一曲目、行ってみよう」

霊「おゝ(棒)」

梗「もうちょっと感情とか抑揚とかつけようよ……(汗)」

何かの曲

~~~~~ ♪~~~~~

~~~~~ ♪~~~~~

~~~~~ ♪~~~~~

舞台裏

「メタ過ぎる発言どーも。でもアカウント停止らしいですし、怖い話じゃねーですか」

「まあ、正直音の無い歌詞に価値を見出さない作者は、助かったあゝとか思ってるけどね」

「歌とか小説で載せても、ただの詩じゃねーですか」

「まあ、そう言わない。どんなに読んでかつたるくても、そういうこと言わない」

「面倒なことで……ご機嫌伺いども」

「だから、そういうこと言わない。じゃあ最後にタマちゃん。今日の感想を一言、このラジオを見てくれ、どう思う?」

「すごく……グダグダでした」

## 第一回放送（後書き）

どうでしたでしょうか？

こんな風にゆるーく、またーり、てきとーにやってきます。

次回のゲストは、電気猫さんの小説から東方雷精誕のライカさんを予定しています。

## 第二回放送（前書き）

注意書き：キャラ崩壊が激しいです。設定も曖昧で、ノリだけの適当さです。注意ください。

第二回放送です。今回は幻想郷で異変が起きたようです。から雷精のライカさんをゲストに迎えての放送です。

## 目録

～紅魔館出張従者隊～

パーソナリティー

- ・十六夜赤紗
- ・十六夜咲夜

## お品書き

- ・挨拶
- ・客人（ゲスト紹介）
- ・郵便（お便りコーナー）
- ・主からの無茶振り（作者からのお題にそって何かする）  
フリートーク
- ・休憩
- ・楽曲（曲放送）
- ・舞台裏（????）

・おぜう様の思いつき（緊急企画、何か特別なことでもなければ基本無し）



## 第二回放送

独電波 第二回放送 〱紅魔館出張従者隊〱

本日のパーソナリティ

赤↓十六夜赤紗。オリキャラ執事。ツツコミ。

咲↓十六夜咲夜。半オリキャラと化したロリスキー。

ラ↓ライカ。咲夜のストライクゾーンど真ん中の妖精。紅魔館の副メイド長。

咲「我が世の春がキタアアアーーーー！！！！」

赤「うるさいわ！」

咲「ついにキター！紅魔館出張従者隊！」

赤「作者はすでに面倒になってきているがな」

咲「このラジオは私、十六夜咲夜がお届けするわ」

赤「会話拾え！！俺を外すな！！！！」

咲「このうるさいのがもう一人のパーソナリティの」

赤「うるさいは余計だ。ていうか、お前のせいだ！……まあいい、十六夜赤紗だ」

咲「ふふ、ついに私の時代がやってきたようね」

赤「なんでお前そんなテンション高いんだよ……？」

咲「愚問だ！……」

赤「お前誰だよ！……？」

咲「PADI「バカ！……そういう利権関係の面倒なネタは禁止だ！……」……まあいいわ」

赤「お前このラジオ削除されるぞ」

咲「私は一向に構わないわ！……」

赤「構えよバカ！……？」

咲「そう言えば、タイトルコールやってなかったわね」

赤「だから無視するな！……ラジオなのに会話拾わないってどうなんだよ！……？」

咲「ふう、もう、うるさいわね」

赤「誰のせいだ、誰の！……？」

咲「自業自得よ」

赤「お前………いい加減にしろよ」

咲「（まず、ふざけすぎたわね）」

赤「粛清！……」

ピチューン

赤「では、気を取り直して………第二回東方独電波！……」

咲「紅魔館出張従者隊！……」

赤・咲「始まり始まり~~~~!!!!」

咲「これは……まずいわね」

赤「どうかしたか？」

咲「第一回放送と状況が被ってるわ!!!」

赤「……んで？」

咲「何とかしてこの状況を変えないと!!」

赤「そんなことより、早くゲストを呼べ」

咲「バラエティでネタ被りなんて最悪よ!？」

赤「今更何か変えられるわけないだろ!!もう本番中だぞ!？アドリブ止める!」

咲「ふざけるな!!」

赤「だからお前、誰だよ!？」

咲「それはともかく、しょうがないわね、ならゲストに行きましょう」

赤「結局そちに行くのか……だったらさっきの時点で素直に進めればよかっただろうに」

咲「え……？何かしら？よく聞き取れなかったわ」

赤「隣で話しているのに聞き取れないわけないだろ!？いや、もういいわ、お前にツツコミしてたら終らん」

咲「ツツコミだなんて……卑猥ね」

赤「そりやお前の頭がだろ、じゃあ今日の客人だ。妹様のお相手兼紅魔館の副メイド長、雷精のライカだ」

ラ「ご紹介預かりました。ライカと申します。本日はよろしく願  
いします」

咲「幼女キターーーーーー!!!!!!」

ラ「ひうつ!」

赤「落ち着けバカたれ!!!」

咲「幼女!おどおど!メイド!涙目!パーフェクトだわ!!!ちょ  
つとお姉さんといいことしない?」

ラ「え?あの?ちょ、落ち着いてください咲夜さん!」

赤「だから止めい!!お前、いい加減にしとかないとただの犯罪者  
だぞ!」

咲「いた、ハリセンで叩か……………そうね、少し落ち着いたわ。だ  
からその刃物は仕舞ってもらえるかしら」

ラ「赤紗さん、いくらなんでもソレでのツツコミは危険ですって」

赤「大丈夫だ、こいつに限って失血死は無いだろうから」

咲「そういう問題かしら?」

赤「ああ、もういいから鼻血拭け。今の内に紹介しとくが、俺のい  
ない世界の紅魔館のメイドだ」

咲「ざつくりしすぎな上に、メタな発言乙」

ラ「いえ、メタもなにもこの企画自体メタな気がするんですが…」

赤「言ってくれるな。そういうもんだと諦めろ」

咲「フォー乙」

赤「お前は………なんと言うか、瀟洒はどこに行ったんだ?そんな  
で大丈夫か?」

咲「大丈夫だ、問題ない」

赤「それフラグだからな。はあ、まあいい。じゃあゲストも呼んだ  
し、次のコーナー行くぞ」

ラ「一番良いコーナーでお願いします…」

赤「お前も結構ノリがいいな……」

咲「ところで今更だけれども、お客様の前なのに口調変えないでい  
いのかしら?」

赤「無礼講だからいいらしいぞ」

ラ「無礼講……？」

咲「無礼講よ」

赤「無礼講だ」

咲「じゃあ、次のコーナー行くわよ」

赤「郵便のコーナー。ぶっちゃけて言ってお便りだな」

ラ「ラジオの基本ですね」

赤「作者自身、ラジオはほとんど聞いたこと無いけどな」

咲「では、一通目のお便り……あら？」

赤「前回もお便りの募集したんだが……誰一人として出してくれ  
た人がいなかったんだ……」

咲「仕方無いわね、また幻想郷住民かたお便りでお茶を濁すわよ」

ラ「残念です……視聴者様のお便り期待してたんですが……」

赤「気を取り直して、本日最初のお便りはラジオネーム『覗き魔』  
さんからのお便りだ。『暇だったから出してあげたわよ。そんなこ  
とより最近私の式が私に冷たい気がするのよ、従者としてどう思う  
かしら？』死ねばいいと思う。けっ」

ラ「それは言いすぎじゃ……」

咲「そう言えば、あのスキマとは仲が悪いという設定だったわね」

赤「設定とか言うな」

咲「まあ、それは置いておいて、お便りの返答をするわ。とりあえ  
ず、その式に嫌われるようなことをしたのか、もしくは嫌われるよ  
うな部分があるのではないかしら？振り返って見れば案外原因も見  
つかるかもしれないわよ」

赤「珍しくまともに返したな」

ラ「珍しいんですか……」

咲「（ニヤリ）最初だけね」

ラ「うわ…悪い笑み…」

赤「嫌な予感はあるが、次お前な」

咲「ラジオネーム『油揚げ大好きな式』さんから。あら、さっきの  
お便りの原因が分かるかもしれないわね。えっと？『どうにも最近、  
主が八雲ラジオなるものを画策しているらしいのですが、私の主は  
いつも気まぐれに自分にとって面白そうなことを考え付いては私に  
実行させます。ただでさえ、炊事洗濯などの家事から、結界の管理  
まで投げられて過労気味なのですが、この上さらにとなると、倒れ  
ます。なるべく主とは顔を合わせないようにしてラジオの話を切り  
出されないようにしているのですが、いつまでもこのままではいら  
れません。どうにかならないものでしょうか？』なるほど、やはり  
本人の自業自得だったわね」

赤「とつとと死んでしまえ。BB「ストップよ。それ以上はこのラ  
ジオが終了するわ」……チッ」

ラ「NGワード全開ですね。本当のラジオなら放送中止ですよこれ」

赤「二文字までならセーフだ。だから気にするな。それより咲夜、  
答えてやれ」

咲「そうね、とりあえず、作者はそんなラジオ面倒すぎて作れない  
ので、無視しておいて良いわよ。それに、八雲家がメインのオリキ  
ヤラの小説は書いてないから、大丈夫よ」

赤「何と言うか……メタいな」

ラ「メタいですね」

咲「気にすること無いわよ」

三人「……………」

赤「ラジオで沈黙は放送事故だな……じゃあ、次俺だな。ラジオネ  
ーム『竹取ニート野垂れ死ね』さん………なんか恨みのあるラジ  
オネームだな。えっと内容は『憎いあいつは不老不死。そんなやつ  
にスカツと恨みを晴らせる方法を教えてください』………なんか怨恨  
に塗れたお便りだな。とりあえず、落とし穴が基本だ。穴の中に何

を入れるかによつて、爽快感が決まると言つて良い」

咲「何を言っているかしらこの人は。情緒不安定になっているのね、きつとあなたは欲求不満なのよ。一発抜けばスカツと「止める……お前、この小説はノクターンじゃないんだからな？」……仕方無いわね。ナイフでブスツと刺しなさい」

赤「それはそれでどうかと思うが、まあ不老不死だしありなのかもしれないな」

ラ「……………」

赤「ん？どうかしたか？」

ラ「…いえ、ちよつと」

咲「ちよつと？」

ラ「抜くつて……何を抜くんですか？」

赤「……………」

咲「……………」

赤「……まぶしいな」

咲「……初心<sup>うぶ</sup>なところもまたいいわ」

赤「お前……そろそろ止めとけよ？」

咲「それでは次、ラジオネーム『世界一美しいお姫様』さん、自意識過剰もいいところなラジオネームね。『退屈なので何か異変起してもいいですか？』霊夢に言いなさい、霊夢に。あ、でもまた月に何かするのはダメよ。お嬢様が不機嫌になられ……いえ……むっすりしたお嬢様……良いわね」

ラ「咲夜さん、本番中ですので妄想は控えた方が……」

赤「まったくだ。鼻血拭け。鼻から溢れまくつてるんだよ。とりあえず、暇ならお前のとこにいかにも幸薄そうな兎がいただろ。あれでも苛めて暇を潰してる。というわけで次のお便りだ。ラジオネーム『狂気の兎』さんから。って、噂をすればなんとかって言うような何々？『永遠亭に来てから、どうにも不幸な目にばかり合っているような気がするのですが、どうすればこの不幸の連鎖は終わりますか

？』諦める。お前はそういう立ち居地なんだから仕様が無い。以上」  
ラ「ザックリ切りますね……」

咲「それはひどいんじゃないかしら？もうちょっと慰めの言葉をかけてあげてもいいでしょうに」

赤「じゃあ、咲夜、お前が何か言ってやれよ」

咲「夜中に私のところに来なさい。たっぷり可愛がつてあげるわ」  
赤「……お前は何を言ってるんだ」

ラ「いつそ開き直るのも手かもしれませんがよ狂気の兎さん。そう言うものだと割り切れば案外不幸に感じないものですから」

赤「経験から来る話か？妙に説得力があるな」

咲「じゃあ、次のお便りを読むわよ。ラジオネーム『地底在住の自由人』さんから。……誰かしら？」

赤「俺の予想だと、あの妹じゃないか？ふらふらとどこへともなく彷徨ってるし」

咲「そうね……内容は『この間のショートケーキは中々美味しかったよ。ご馳走様。まだいつか食べに行くね』って、あれ食べたのあなただったのね！！」

赤「ああ、あれか。いつの間にか妹様のケーキが一つ消え、怒った妹様が紅魔館全域を襲撃したあの悪夢。ボロボロになったお嬢様と打ち揚げられた魚のように痙攣するパチユリー様、そして門の前で死んだように気絶する美鈴が印象的だったな」

ラ「フランドールお嬢様が落ち着くまでに5回ぐらい死にかけました……」

咲「そうね……あら？」

赤「どうした？」

咲「美鈴って誰だったかしら？」

ラ「……え？」

赤「いや、お前いつも頭にナイフ刺しておいて知らないも何もないだろ」

咲「あれは中国じゃない」

赤「それはお前らが勝手に呼んでるだけだろ……あれ？そういや、美鈴がこのスタジオにいないな」

ラ「あ、本当だ！ 美鈴さん！？」

咲「何言ってるのよ、収録現場に私たち以外いないわよ？」

赤「あそこ」

咲「？」

赤「プロデューサーのお嬢様と妹様だ」

咲「お嬢様！？」

赤「鼻血拭けバカ。パチユリー様にラジオの宣伝をやらせ、ご自分は妹様と俺たちの四人で詳しい打ち合わせをしただろ」

咲「朝紅魔館でやってたあれ……」

赤「パチユリー様は普段から運動なんてされないのに、喘息で顔と息が引き攣りながらこの一週間ラジオの宣伝をしていたんだぞ」

ラ「パチユリー様そんな事やってらしたんですか……」

咲「パチユリー様……」

赤「そのせいで広報担当のパチユリー様は筋肉痛で倒れた」

咲「パチユリー様エ……」

ラ「パチユリー様の私室からのうめき声はそれが原因ですか……」

赤「一週間後に筋肉痛になりだすパチユリー様はちよつと不味いんじゃないかと思うんだがな」

咲「大丈夫でしょ、魔女だし。因みに私は翌日くらいかしら」

赤「お嬢様の場合は？」

咲「二日後くらいかしら？」

赤「聞いた俺も悪かったが、普通に答えるお前もどうかしてるぞ」

咲「お嬢様のことでこの私が知らないことなんて無いわ！！」

赤「すごい自信だな、アホくさい」

ラ「て言うか吸血鬼も筋肉痛になるんですか……？」

咲「お嬢様も弾幕ごっこした二日後くらいにちよつと辛そうにしてるわよ」

赤「……………いや、何も言わんでおく。何言っても殺されそうな気

がするし。で、結局お嬢様、美鈴は……え？すっかり忘れてた？美鈴……小悪魔ですらカメラマンとして役割を与えられたのに……」

咲「まあ、中国だから仕方無いわ」

赤「どんな言い訳、ってお嬢様も頷かないでください……って、い、妹様！？」

ラ「だ、駄目ですフランさん！パチユリーさんが！パチユリーさんが！」

咲「やめて、パチユリー様はライフはゼロよ！？」

赤「い、妹様あああああ……！！！」

—

(・ω・)

しばらくお待ちください。

(つ旦O

と——)

赤「さ、さて……次の、次の……お、おた、お便り」

咲「嫌な事件だったわね。まあ、私の針治療に不可能は無かったということね」

赤「鍼治療ちげーよ！？それは針だろ」

咲「同じじゃない」

赤「ちげーよバカたれ」

咲「縫い針は気に入らなかったのね、ならマチ針にするわ

赤「だから、そういう問題じゃない！裁縫針を使っな！長さ足らねーよ……！！」

咲「ツツコミに忙しいわね。代わりに私がお便りを読ませてもらうわね」

赤「ダメに決まってるだろ。次は俺だ。ラジオネーム『マリアリ推進派人形遣い』さんから……あの白黒のこととなると咲夜以上にぶっ飛ぶと噂のヤツか……読みたくないな、まあ読まないわけにもいなか。『最近魔理沙がうちに来ません、何故でしょうか?』そりゃ、貞操の危険でも感じたんだろ」

咲「貞操……じゅるり……」

ラ「ひう!」

赤「おい、何ゲスト舐めるように見てる、いくら同性だって言っても、お前の視線はセクハラなんだよ、自重しろ」

咲「失礼なこと言うわね。まあ良いわ、次のお便りよ。ラジオネーム『パパラッチ天狗』……あの鴉天狗ね。『コメンテーターとした私もラジオに出してください』作者に言いなさい。もしくはこのラジオに出たいならお嬢様に言いなさい」

赤「あの天狗はやかましいからいらん」

ラ「取材がしつこいのでちょっと……」

咲「残念、ゲストも含めたパーソナリティが満場一致でいらないと言っているわ。だからこの話は無かったことに」

赤「お前も否定派なんだな「寧ろ賛成派がいるのかしら?」……まあユーザーの方々にはあの天狗が好きだという人たちもいるんだよ。原作者のお気に入りキャラらしいからな。とりあえず、次行くぞ。」

ラ「ラジオネーム『楽団三女』さん。あの幽霊楽団の三女ね。何してるのかしら……」  
「どうにも私の影が薄いのですが、人気投票上位組みの紅魔館の皆さんに是非人気の秘訣を教えてください、お便りしました」  
「……」  
「人気の秘訣ねえ、俺は原作には存在しないので、何気に四位以下に落ちたことの無い咲夜に教えてもらおうか」

ラ「私も原作にはいないので気になります」

咲「絵よ。原作がアレだから、主に二次でどれだけ上手い絵を描いてもらえるかがポイントよ。原作キャラで、ファンが思い浮かべる

ようなのは、全部二次創作に過ぎないわ」

赤「なんつう身も蓋も無いことも……格闘ゲームは？」

咲「あれも原作者が関わったとは言え、絵は原作者が描いてないわ。絵が全てとは言わない。けれど、絵は非常に重要よ」

ラ「なるほど……」

赤「本当かよ………？」

咲「知らないわよ。全部適当に決まってるじゃない」

ラ「ええ！？」

赤「おいしい！？」

咲「普通に考えて人気の秘訣なんて知ってるわけじゃない、バカじゃないの？」

赤「……クロス」

咲「あ……」

ピチューン

赤「はい、では次は主からの無茶振りのコーナー。っていうか、お嬢様が無茶振りしてくれるのはいつものことだろうに」

咲「ほとんど被害を被るのは私よね」

赤「なんだ咲夜………生きてたのか」

咲「お嬢様とベッドインするまでは死ねないわ」

赤「そうか、まあせいぜい頑張ってくれ「赤紗！？」……ん？空耳でも聞こえたか？」

ラ「ベッドイン……？フランドールお嬢様とは毎日同じベッドで寝てますけど……」

咲「………主従井」

赤「止める、本当にノクターンに片足突っ込みそうだから、本気で

止める……」

咲「それで、今回はどんなことをやらされるの？全裸かしら？全裸でゲストと……フヒヒ」

赤「止めるバカ！！このラジオのCERO判定Zにするつもりか！」

咲「CERO判定ってゲームじゃなかったかしら？」

赤「DVDとかにも付いてるだろ」

咲「幻想郷にDVDやゲームなんてあるわけじゃない」

赤「お前が先に言っただろうが！！」

咲「いや、もうそれはいいから、結局何をするのよ？」

赤「前回の神社勢も似たようなのやってたが、条件付きトークだ。簡単に言えば、指定された条件を満たしながら会話する、というものだ」

咲「居酒屋ゲーム……」

赤「バカ！！元ネタがバレるだろ、止める！」

咲「それで？その条件っていうのは何かしら？」

赤「俺とゲストの分は、妹様からわざわざ指定されているぞ。俺が『三点倒立しながら発言』で、ゲストが『水の入ったコップを載せたお盆を頭の上に載せて発言する。手で支えても良い』、だそうだ。妹様絶好調だな」

ラ「フランさん……」

赤「それと咲夜の分はお嬢様から指定されているから、この紙を読み上げる」

咲「えっと……『フレードパーク風にランニングマシンで一定距離を走ると発言権ゲット』……え？」

ラ「それって、かなりきついんじゃない？」

赤「お嬢様……なんて酷い。ただでさえ最近働きすぎて、ポンコツ

「気味なのに」

咲「そんな哀れみの眼で見ないでちょうだい。お嬢様からの指示、私はこなせてみせる!!」

赤「お嬢様がフリップを、えっと……最後まで走りきつたらご褒美を上げる」、だそうだ」

咲「ご、ご褒美……ぶはっ！！！」

赤「鼻血自重しろ。何を想像してる。なんで一々この小説をノクタン行きにしたがるんだよ、お前」

咲「さあ！やるわよ！！」

赤「盛り上がつてるところ悪いが、絶対にお前の考えているようなことじゃないと思うぞ、俺は」

[illegible]

「あ、もう始まつてるんですね咲夜さんの……」

赤「ほれ、ランニングマシン、走らないとお前の発言全部削除されるぞ？」

頑張っています。

咲「ぜーはーぜーはー、や、やる、わね……すでに……倒立……してるなんて」

赤「それ一言喋るためにただ疲れてるんだよ……お嬢様、一定距離つてのをもっと短く。出ないと収録終る前に咲夜が死にます」

「咲  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
……」

(愕然とした表情)

「……とっこれでいいのかな……？ちよつと難しい……」

超頑張つて走っています。

咲「はー、はー、はー、早く、始めて……でないと……死ぬ……」

赤「了解だ。お題はパチューリ様からもらっている。えっと……」

一番嫌いなやつの愚痴」って言えるかあああああああ！！！！  
！ラジオでなんて恐ろしい話題振ってくるんだ、パチュリー様。お嬢様、何か話題を……『紅魔館の豆知識』……？まあ、ここにいるゲストも含めた全員が紅魔館で働いているので出来くないが、じやあ、ゲストからよろしく」

ラ「わ、私からですか？えっ…と、『妖精メイドの皆さんは働かないイメージがありますが、働いた時のメリットと働かなかった時のデメリットを伝えてあげればちゃんと働いてくれます』」

赤「ほう」

ラ「妖精と言うのは子供のようなものですので、ただしかるだけでは逆にしなくなるだけなんですよ。働いてくれたらその分だけご褒美をあげないといけないんです」

赤「妖精本人から聞くと説得力がある気もするが、一步間違えれば職場への要求でしかないな」

ラ「まあそれでもサボる子は出てくるので、そんな子に対しては一緒に手伝ってあげればいいんです。見てないからサボるのだから常に目に入るところに居ればサボらなくなります。後は手伝う時間を少しずつ減らしていけば一人でもきちんとやってくれるようになります」

赤「じゃあ、次に俺か。咲夜はまだ死に掛けてるし。紅魔館のね……『妖精メイドが働くようになったのは、紅魔館の面々が幻想郷に来てから』とか？」

ラ「そうなんですか？」

死ぬ気で走っています。

咲「ぜはーぜはーぜはー。そ、そうなの？」

赤「お嬢様、もっと距離を短く。咲夜が死に掛けています。まあ、それはともかく、実はそうだ。オリ設定だけだな」



交代中。少々お待ちください。

緊急パーソナリティー

レ↓レミリアプロ（プロデューサーの略）。

フ↓フランドールプロ。

レ「ついに私の時代が来たわー!!」

フ「お姉様……咲夜とノリが同じだよ……」

レ「ホント……咲夜はなんでああなったのかしらね……」

フ「こればかりは私にも分かんないよ……」

レ「そう言えば、今回のゲストの妖精と随分仲が良いらしいわね」

フ「うん。友達だからね」

レ「たった一人の友達ね……涙を誘うわ」

フ「お姉様なんて一人もいないくせに」

レ「な!?! いいいい、いるわよ。霊夢とか」

フ「霊夢……? フツ」

レ「な、鼻で笑ったわね!! 妹のくせに」

フ「やる!?! なんならこの間の決着つけてもいいよ!?! ミートボールとお菓子の恨み!!」

レ「喧嘩なら買うわよ!! ケーキと秘蔵酒の恨み!!」

（・ω・） しばらくお待ちください。

（つ旦〇

と——）（ちなみに、これは文字数にカウントされません）

レ「ゼーはーゼーはー。やるわねフラン」

フ「ゼーはーゼーはー。お姉様こそ」

レ「さて、それは置いておいて、一つ相談があるのだけれど」

フ「お姉様が？私に？珍しいね」

レ「最近、どうも咲夜を見ていると寒気がしてくるのだけれど、どうにかならないかしら？」

フ「禁忌「レーヴァテイン」！」

レ「なななな、何するのよ！？」

フ「寒気がするって言うから暖めてあげようと思って」

レ「暖まる前に死ぬわよ！！」

フ「ならこの羽の飾りちぎって食べる？甘くておいしいよ？」

レ「え、嘘。それって食べれるの！？」

フ「まあ、嘘だけど」

レ「そ、そうよね。さすがにそれは無いわよね」

フ「本当は粉にしてふりかけみたいに食べるんだよ」

レ「ええ！？」

フ「もう、お姉様、冗談に決まってるよ」

レ「あなた結構嘘吐きね」

フ「悪魔だし」

レ「話は変わるのだけれど、美鈴どうしてるのかしら？さすがに忘れてきたのには罪悪感を感じるわね」

フ「……？お姉様」

レ「何かしら？」

フ「美鈴って誰？」

レ「あなたも本名忘れてるのね………美鈴、不憫な子」

フ「ああ、美鈴、美鈴ね、思い出したよ。うん、ちゃんと覚えてるよ」

レ「今思い出したって言ったわよね」

フ「あれでしょ？夜中に紅魔館の廊下を走ってる黒っぽい骸骨さん」

レ「誰よそれ！？え？何？夜の紅魔館にそんなのがいるの！？」

フ「あれ？じゃあ、いつも天井裏に潜んでる……ああ、あれは咲夜か」

レ「咲夜……天井裏で何してるのよ……」

フ「うーん。あ、分かった正門で」

レ「そうそうそれそ」……」

フ「全裸で踊ってる人だ！！」

レ「って違うわよ！？誰よそれ！！！？本当に私の知ってる紅魔館！？驚愕の事実が次々と沸いてくるのだけれど」

フ「ねえ、お姉様知ってる？」

レ「何かしら？」

フ「次で千字だよ」

レ「え？」

フ「今のお姉様の台詞で千字言ったので、私の勝ちね」

レ「しまった~~~~！！！！驚愕の事実連発で勝負を忘れてたあああ！！！！」

フ「っていうわけで、今回の緊急企画はこれで終わりだよ。咲夜、赤紗、ライカ、後はよろしくね」

赤「はい、というわけで次のコーナー。フリートーク。なんだが」  
咲「どうしたの？」

赤「時間が押してるんな。もう最後の曲放送に入らないと不味い。というわけで楽曲のコーナー」

咲「最後の曲放送のコーナーだけはどの放送局でも名前が思いつかないのよね」

ラ「うちの作者さんもキャラクターソングイメージとかで頭ひねってました」

咲「それって意味あるのかしら……」  
 ラ「バイト数が無駄に増えるだけとしか……」  
 赤「だから言ってくれるな……」

[illegible][illegible][illegible][illegible]

赤「お疲れ様でした。お嬢様、妹様、パチユリー様、それと咲夜」  
咲「お疲れ様でした」

赤「はあゝ、だるいな。知ってるか？これ次回も俺たちなんだぞ？」

咲「今回のゲストは……男か……つまらないわね」

赤「お前ゲストにまで毒牙にかけようとするの止めるよ……」

咲「失礼ね。愛よ」

赤「前後の文脈が無く、さらに鼻から血が溢れてなければいい台詞だな……はあ」

## 第二回放送（後書き）

久々の第二回放送でした。

知ってるか？次回もまたこの紅魔館メンバーなんだぜ？

咲夜さん……ノクターン行きだけは止めてください。

次回のゲストは、陸攻さんの小説から幻想の運び屋より上松光さんを予定しています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6539v/>

---

東方独電波

2011年11月15日08時14分発行